

「知的素材」の系譜

ヘレニズム・ローマ期における伝承をめぐって

金澤 修

はじめに

執筆順からすれば 12 番目、エンネアデスの配列からすれば II-4 に位置付けられる論考には、ボルピュリオス『プロティノスの生涯』において『二つの素材について Περί τῶν δύο ὕλων』というタイトルがつけられている¹⁾。ここから分かるように、プロティノスの思想においては、二つの「素材 ὕλη」が一定の役割を果たしている。知性界での「知的素材 ὕλη νοητή」と言われるもの、感性界での「感性界素材 ὕλη αἰσθητή」と言われるものである。それら二つは、「何らかの基体 ὑποκείμενόν τι」であり形相の「受け皿 ὑποδοχή」²⁾と位置付けられるという特徴を共有してはいるものの、認められる場面が異なっているために価値は正反対である。「知的素材」は、「善」なる「一者 τὸ ἓν」に由来し、それが一者を振り返る「最初の運動 ἡ κίνησις ἡ πρώτη」³⁾として、つまり発出の過程における最初の「差異性 ἐτερότης」として「知性」の成立に関わる場面で認められる³⁾。

1) ボルピュリオス『プロティノスの生涯』第四章および第二十四章。

2) *Enn.*, II-4, 1.1 (= アリストテレス『自然学』第一巻第九章 192a31)。以下プロティノスを引用する際には、*Plotini Opera*, I-III (H-S2 = editio minor), Henry, P., et Schwyzer, H.-R., Oxford, 1964-83 に基づく。また *Plotinus*, vol. II, Armstrong, A. H., Cambridge, 1966 および *Plotinus, Ennead II.4. On Matter*, Long, A. A., 2022 を適宜参照した。

その意味では知性界そのものを支えるものとして「知的素材」は「プラス」な価値を持つ。これに対し「感性界素材」は、この世界の成立を支える限りでは必要なものではあるが、あらゆる「善」を欠いたものとして、つまり「善」の対極にあるものという意味で「悪」であり、「諸悪」の起源として位置付けられる限りで「マイナス」な価値を持つ存在である。そしてこの「感性界素材」は、プラトン『ティマイオス』の「受け皿」や「場所・コーラ」や『法律』の「必然」と重ね合わされ、その性格やあり方、感性界への関わりを含めて、二世紀のアテナイのプラトン主義者であるプルタルコス、アプレイウス、プルタルコス、アッティコスなど、さらにはアルキノオスやヌメニオスなど、多くの「プラトン主義者」で議論されてきており、内容の差異を含めて多くの解釈がプロティノス以前にある。そう考えると、プロティノスの主張内容は必ずしも彼らの議論と一致するものではないものの、しかし一連のプラトン解釈史の延長線上にあると言って良いだろう。

これに対して「知的素材」は、「感性界素材」ほどには中期プラトン主義者の間の議論がない。これは、語彙としては紀元前 50 年前後に流通したアリストテレス『形而上学』に遡る上に⁴⁾、プラトンの文献的な根拠を欠いていることが理由として挙げられるだろう。もちろんそれは「知的素材」という概念がプラトン解釈として成立しないということを意味するわけではない。というのも「知的素材」は、「一と不定の二」や「不文の教説」といったプラトン周辺の問題と関わるからである。そして「プラトン主義者の間で」議論されてこなかったという印象を我々が抱くのは、「知的素材」と関わりのある「一と不定の二」という問題が、むしろピュタゴラス派の内部で取り上げられてきことによる。

3) *Enn.*, II-4, 5.25-39. この中の 30-32 はアリストテレス『自然学』第三巻第二章 201b19-28 をパラフレーズしたものである。

4) 『形而上学』第七巻第十章 1036a9 参照。そこでは「数学対象」に関わるものとされている。1037a4、1045a34 も同様。また種類関係において、それぞれの種が差異によって区別される際の類も「知的素材」と位置付けられる

二つの素材についての現代での議論にも目を向けるなら、「感性界素材」については、それが「悪」でもあるために、一元論という観点から、その起源に関して多くの議論が行われている。これに対し「知的素材」では、その起源に疑義を挟む余地はないため、起源に関するものは少ない。むしろ「知的素材」を巡る議論としては、プロティノスの思想体系における役割について論じられることが多い。田ノ頭の記述によれば⁵⁾、「知的素材の役割は後期作品においても維持されている」か、「中期作品以降は姿を消し、アリストテレスの可能態と現実態、および可能態にあるものの完成としてのエネルゲイアという考え方が、これにとって代わった」か、というものである。しかしながら、「維持されたか否か」という論点は、「維持」という概念が曖昧である故に決着がつく問題ではないだろう。というのも「知的素材」という語彙の有無を「維持」の判別点にすれば、確かに中期以降は「維持されていない」。しかし「知的素材の役割」に焦点を当てて、「可能態と現実態にとって代わった」のであれば、ある意味では「維持されている」ことになるからである。

本稿では、プロティノスの「知的素材」について、その概念の起源をたどり、上記の議論に一つの提案を行いたい。具体的には「一と不定の二」なる原理、「不文の教説」を扱うことで、プロティノスの体系に存在する「知的素材」の哲学的な系譜を明らかにする。その上で「知的素材」概念が維持されているか否かを、*Enn.*, VI-6『数について』において見ることにしたい。

1) 「一と不定の二」と初期アカデメイア派

ピュタゴラス主義（或いはピュタゴラス派）は、哲学史において扱いに困る対象の一つである。とりわけヘレニズム・ローマ帝政期の「新ピュタ

5) 主要な議論と論者については以下を参照。田ノ頭安彦「プロティノスの素材論、その一：知的素材と愛」京都哲學會編『哲學研究』44巻6号1969, pp. 465-486.

グラス主義」と比較して、プラトン以前のピュタゴラス主義についてはその思想の復元が難しい。その理由はチェントローネによれば「古代のピュタゴラス主義の歴史の再構成が困難になるのは、利用可能な資料の欠如のためではなく、むしろそれが多すぎるため」なのだという⁶⁾。つまりヘレニズム・ローマ期の資料の多さの故に、そのどれが古代ピュタゴラス主義に遡るのか、資料の精査が難しいのだ。その事情はヘレニズム・ローマ期の新ピュタゴラス派にも当てはまる。つまり彼らもまたピュタゴラスその人の教説を見出そうとして躍起になっていたのである。その不足を補填する目的でプラトンの教説は使われた。その第一歩は、後に見るように、両者の一致点を指摘するアリストテレスにあらうが、同時にそれは初期アカデメイア派にも遡ることができる。スペウシッポスを見てみよう。以下はプロクロス『パルメニデス注釈』におけるスペウシッポスの原理についての報告である。

古の人々が認めていた学説を示しながら、スペウシッポスは以下のよう
に理解している。では彼は何と言っているのか？彼らは「一」は
「存在するもの」よりも上位であると考え、「存在するもの」は「一」
に由来しており、そしてそれ自身は原理に基づいた制約から逃れてい
るとした。（略）それ故に、まさにこれが古の人々の見解であると彼
は証言している。つまり「一」について、それは「存在するもの」の
上に位置付けられ、「一」の後に「無限定の二」がその後にくるとい
うのである⁷⁾。

Et ut Speusippus -- narans tamquam placentia antiquis -- audit.

6) B. チェントローネ（斉藤憲訳）『ピュタゴラス派』（以下チェントローネ）岩波書店 2000, p. 1.

7) プロクロスの注釈書そのものは散逸してしまっており、13 世紀のムールベケのグイレルムス（Guillelmus de Morbeka, William of Moerbeke）によるラテン語訳が参照される。ブルケルト（Burkert, W., *Lore and Science in Ancient Pythagoreanism*, 1972, p. 63）参照。

quid dicit? 'Le unum enim melius ente putantes et a quo le ens, et ab ea que secundum principium habitudine ipsum liberaverunt. ... Quare testatur et iste hanc esse antiquorum opinionem de uno, quod ultra ens sursum raptum est et quod post unum interminabilis dualitas.

プロクロス『パルメニデス注釈』
(=スベウシッポス「断片」48)⁸⁾

ブルケルトやチェントローネによれば「古の人々 antiquis」とはピュタゴラス派を意味しているというが⁹⁾、いずれにせよここではスベウシッポスによって「存在を超える一」と「不定の二」が導かれていることに注意が必要である。チェントローネはこれを「ピュタゴラス主義のプラトン化の最初の例」としているが、それは実際のピュタゴラス派の原理は「一 τὸ ἓν」と「無限定なもの τὸ ἄπειρον」であったという想定に基づく¹⁰⁾。プラトンの学説がピュタゴラスに遡るという位置付けがクセノクラテスなどによってされていたと言うが¹¹⁾、いずれにせよ初期アカデメイア内部でピュタゴラス主義をプラトンと一致させようとしていたことは確実である¹²⁾。

両者が一致するという理解はテオプラストスの中にも見られる。これはもちろん、初期アカデメイア派への批判的な視点による。

さて現在は多くの者が何らかの原理まで辿り着きつつも、そこで止ま

8) タラン (Tarán, L., *Speusippus of Athens*, Brill, 1981, pp. 350-356) 参照。またチェントローネ, p. 142.

9) ブルケルト (p. 63) およびチェントローネ (p. 140) は「スベウシッポスにとっての古の人々」とするが、タランは「プロクロスにとっての古の人々」と解する。

10) チェントローネ (pp. 141-144) によれば、「限定されたもの τὸ πεπερασμένον」と「無限定なもの τὸ ἄπειρον」という組み合わせの可能性もあるという。

11) チェントローネ, pp. 175-178.

12) チェントローネ, pp. 140-141.

っている。まさに「一」と「不定の二」という原理を定めた人たちのように。（略）さてプラトンは（事物を）諸原理へと上昇還元する際に、他の（事物）を諸イデアに、また諸イデアを諸数に、諸数から諸原理（＝「一」と「不定の二」）へと関連づけ、その後に生成の順序に基づいて、先に述べた事物（天体、場所等）へ（下降演繹する）ように思われる。

νῦν δ' οἷ γε πολλοὶ μέχρι τινὸς ἐλθόντες καταπαύονται, καθάπερ καὶ οἱ τὸ ἐν καὶ τὴν ἀόριστον δυάδα ποιούντες.... Πλάτων μὲν οὖν ἐν τῷ ἀνάγειν εἰς τὰς ἀρχὰς δόξειεν ἂν ἄπταεσθαι τῶν ἄλλων εἰς τὰς ἰδέας ἀνάπτων, ταύτας δ' εἰς τοὺς ἀριθμούς, ἐκ δὲ τούτων εἰς τὰς ἀρχάς, εἴτα κατὰ τὴν γένεσιν μέχρι τῶν εἰρημένων.

テオプラストス『形而上学』6a23-24, 6b11-15.

(=スベウシッポス「断片」59)¹³⁾

テオプラストスが描き出すのは、プラトンを含めた初期アカデメイア派の原理論である。中でもプラトンの記述において彼は、「上昇還元 ἀνάγειν」という過程に言及し、「事物」→「諸イデア」→「諸数」→「一と不定の二」と明確化している。とりわけイデアと数の間の前後関係は、後に見るアリストテレス『形而上学』第一卷六章「諸形相と諸数」とは異なる描写であることに注意すべきであろう。いずれにせよ、ここではプラトンが名指しで上記の原理に関わっているとされている。そして先にも述べたように、このプラトンの原理論は、ピュタゴラスのそれと並行的に扱われることになる。

13) 「下降演繹」は「上昇還元 ἀνάγειν」との対比による補い。テキストは Ross, W. D., et Fobes, F. H., *Theophrastus, Metaphysics*, Oxford, 1929 に基づく。また以下の引用では、ブルケルト、チェントローネ、タランの他、丸野稔『テオプラストスの形而上学』創文社を参照した。また以下、イデアは形相と同義である。

プラトンとピュタゴラス派は、（一と二という原理の）距離を大きく離れたものとしつつ¹⁴⁾、全ての事物は（原理を）模倣しようとしていと主張している。しかしながら、「不定の二」と「一」との何らかの対立があるとする以上、そして「不定の二」の中に「無限定なもの」も「無秩序なもの」も存している、いってみれば全て形を欠いたものは「不定の二」に基づいているとする以上、結局のところ¹⁵⁾、「不定の二」なしで宇宙の本性を（把握すること）は不可能である。むしろこの「不定の二」は「一」と同等であるとか、あるいは「一」よりもより優勢であると彼らは主張している。そのような仕方では彼らはこれらの原理をも対立するものだとして主張しているのである。

Πλάτων δὲ καὶ οἱ Πυθαγόρειοι μακρὰν τὴν ἀπόστασιν, ἐπιμιμεῖσθαι δ' ἐθέλουν ἅπαντα· καίτοι καθάπερ ἀντίθεσιν τινα ποιοῦσιν τῆς ἀορίστου δυνάδος καὶ τοῦ ἑνός, ἐν ᾗ καὶ τὸ ἄπειρον καὶ τὸ ἄτακτον καὶ πᾶσα ὡς εἰπεῖν ἀμορφία καθ' αὐτήν, ὅμως οὐχ οἷόν τε ἄνευ ταύτης τὴν τοῦ ὅλου φύσιν, ἀλλ' οἷον ἰσομοιεῖν ἢ καὶ ὑπερέχειν τῆς ἐτέρας· ἢ καὶ τὰς ἀρχὰς ἐναντίας.

テオプラストス『形而上学』11a26-b7.

この記述は哲学史的観点から重要である。周知の通りテオプラストスによる『自然学説誌』は、紀元前二世紀頃に成立したポセイドニオス『学説誌旧版』へ受け継がれる。その著には、テオプラストス以降のヘレニズム時代の哲学者、医者、天文学者たちの見解が増補され、紀元前一世紀頃に成立した『改訂版学説誌』となり、やがて紀元後一世紀に成立したと推定

14) この「何らかの距離」をどのようなものと解するかで、大きく分けて二つの方向性がある。一つは「原理と事物」、例えばプラトンでは「イデアと感覚対象」である。もう一つは「一と二」である。前者の解釈を取れば、後述の「模倣」という関係がうまく説明できるが、ピュタゴラス派はイデア的な事物から離存する原理を認めていない以上、「大きい」も含めて距離があるという記述とは合致しない。それに対し「一と二」であれば、やはり後述の「対立」という概念とも両立するであろう。ブルケルト（p. 62, n. 57）参照。

15) ブルケルト（p. 62, n. 58）に従い、ὅλωςをὅμωςと読む。

されるアエティオス『学説誌』へ至る。その流れは、一方では現存する擬プルタルコス『哲学者たちの自然学説誌』へ、さらにエウセビオスと擬ガレノス『哲学史』に引き継がれるが、他方ではストバイオス『自然学抜粋集』へと至った。そして初期アカデメイア派はもとより、テオプラストスによっても報告されたピュタゴラスとプラトンの教説の一致という見解は、ヘレニズム期にピュタゴラス派が「一と不定の二」という教説を受け入れる原動力となったと言える。

それではなぜピュタゴラスとプラトンの一致を初期アカデメイア派は行ったのか。チェントローネはその意図をプラトンの教説の権威づけとしている¹⁶⁾。だが同時にその「箔付け」は、或る意味ではピュタゴラス派の原理を改変することによって行われていたとも言える。既に見たように、本来のピュタゴラス派の原理は「一 τὸ ἓν」と「無限定なもの τὸ ἄπειρον」と推定されているが、この「無限定なもの」を「不定の二」へと置き換えることによって、この「箔付け」が成立しているからである。そしてテオプラストスを通じて「一」と「不定の二」は、ピュタゴラス派の原理としてヘレニズム期に広まることになる。

さてこの「一と不定の二」についての教説がそのままプロティノスの「知的素材」に至ったとは考えられない。これまで見てきたように「一と不定の二」は、或る意味で対立する原理として、また或る意味では前後関係を有する原理として扱われてきた。そしてテオプラストスの報告からも明らかなように、諸数や諸形相を構成する原理である限りで、それらは「イデア界」に存在する。確かに「不定」であることは、素材原理に通じる特性である。しかしながらこれまでの報告の中では、「二」に「素材」という属性が明確には与えられておらず、その意味ではこれらの報告が「知的素材」のルーツであるとまでは言えないだろう。さらにそれは、「箔

16) チェントローネ、pp. 134-134.

付け」によって、ピュタゴラス派のものなのか、プラトンのものなのか断定しづらくなっていたとも言えるだろう。

とはいえ、アリストテレスの「断片」、つまり刊行されていたものの中には「不定の二」に「素材」という記述をおこなっている箇所がある。もしそれを参照するならば、アリストテレスの公刊された書物の中では、プラトンもしくはアカデメイア派の主張の中に「知的素材」が存在していたということになる。

さらに（或る）アイデアが（他の）アイデアより先であることもない。というのも諸アイデアは全て同じ仕方で原理であるからである。実際「一そのもの τὸ αὐτοέν」も、「二そのもの τὸ αὐτοδύας」も、「人間そのもの」も、「馬そのもの」も、他のそれぞれのアイデアも、同じ仕方でアイデアだからである。従って、それらアイデアのうち、或るアイデアが他のアイデアよりも先であるなどということはないだろう。結果として或るアイデアが他のアイデアの原理であるということもないだろう。従って「一」と「不定の二」は原理ではない。さらに或るアイデアが他のアイデアによって「形相にされる εἰδοποιεῖσθαι」というのは不合理なことである。それらは全て形相だからである。さらにもし「一」と「不定の二」が原理であるとすれば、アイデアがアイデアによって「形相にされる εἰδοποιουμένη」ことになるだろう。というのも「二そのもの」が「一そのもの」によって（形相にされる）ことになるからだ。実際、彼らは「一」が「形相 εἶδος」であり、「二」は「素材 ὕλη」であるという仕方で、それらを原理そのものであると言っているからである。（けれども先の議論によって）それらは原理ではない。

アリストテレス『アイデアについて「断片」』4¹⁷⁾

17) 断片番号は Ross, W. D., *Aristotelis Fragmenta Selecta*, Oxford, 1955 による。

（＝アフロディシアスのアレクサンドロス『形而上学注釈』86）

確かにここでは「不定の二」は「素材」とされている。しかしながら『アイデアについて』が、「第三人間論」等を用いてアイデア論を論駁する目的を有していた作品であったことを考慮に入れる必要があるだろう。実際、アリストテレスは、「一」と「二」とを、「諸数」、さらには「諸形相」を構成する原理だとは考えていない。アイデアとは原理である以上、原理の原理はあり得ないという立場である。その点では、先に見たスペウシッポスの報告にある「上昇還元」のように、アイデアそのものが原理から構成されるという立場を批判しており、「素材」が原理として、知性界（アイデア界）に位置づけられるべきではないことが強調されているのである。アリストテレスのこの箇所は、否定的な側面を強調されている限りで、プラトンの学説として扱うには躊躇われる資料であったのではないかと考えられる。従って『アイデアについて』の「不定の二」の記述をもって「知的素材」の起源とは全面的にはしがたい。

むしろ「知的素材」のルーツを考える上で重要なのは「不文の教説」であろう。そこにおいて「不定の二」は「素材」と同一視されているからである。この「不文の教説」は主に『形而上学』や『自然学』から再構成されたものであるために、いわゆるヘレニズム期には取り上げられることはなかったと推測される。というのも、上記著作を含め、紀元前50年頃とされる『アリストテレス全集』以前には、その教説の再構成が不可能だったからである。言い換えれば、ヘレニズム期には「一と不定の二」という教説における「ピュタゴラスとプラトンの一致」は認められていたとしても、「不定の二」とは「知的素材」であるというところまでは断言できなかったのではないだろうか。その一例として擬ブルタルコス『哲学者たちの自然学説誌』を見てみよう。

彼（ピュタゴラス）は「（単位としての）一」と「不定の二」を原理

の中に入れている。

擬プルタルコス『哲学者たちの自然学説誌』第一巻三章¹⁸⁾

既述の如くこの書物はアエティオス『学説誌』を本源に持つ。仮にこの「不定の二」が、ピュタゴラスのものではなく、プラトンを含む初期アカデメイア派の学説であると、テオプラストスを手がかりに確証できれば、さらには先のアリストテレス『イデアについて』も併せて参照するならば、「不定の二」を、「イデア界」の原理として「知的素材」とみなすこともできたであろう。だがそれは先に見た「箔付け」を剥がすことができれば、という条件がつく。擬プルタルコスの第一巻第九章は「素材について περὶ ὕλης」と題されているが、そこでの「素材 ὕλη」とは、「生成、消滅、そして様々な変化にとっての第一の基体である τὸ ὑποκείμενον πρῶτον」¹⁹⁾ として、いわゆる「感性界素材」に限定されている。結果として、ヘレニズム期には「知的素材」という概念は、プラトンを理解する上では一般的ではなかったと考えられる。つまりそれは、「不文の教説」の記述を手がかりとして、帝政ローマ期の前後に形成されたものであろう。以下でその問題を見ていこう。

2) 「不文の教説」の位置付け

2-1) 「不文の教説」と『第七書簡』

「不文の教説 ἀγραφα δόγματα」は、字義通りにとるならば、「対話篇のどこにも書かれていないプラトンの教説」を意味している。現代のプラトン研究では、「不文の教説」が存在するのかどうかを認定するのは、それ自体で難しい問題となっている。チャーニス²⁰⁾、ロス²¹⁾、ファインドレ

18) Diels, H., *Doxographi Graeci*, Walter de Gruyter, 1958, p. 281. またプルタルコス（三浦要訳）『モラリア』11 京都大学学術出版会 2004 を参照した。

19) Diels, op. cit., p. 307. ただし πρῶτη を πρῶτον とする。

イ²²⁾、ヴラストス²³⁾、ガスリー²⁴⁾、アーウィン²⁵⁾ など多くの研究者が論じながらも決着が付いていないことが、その状況を示している。だが、それにもかかわらず、プラトン以降の哲学者が深く関心を寄せているのは理由がある。これは『第七書簡』に起源を有している。

私が真剣になっていることについて、私から聞いたにせよ、私以外から聞いたにせよ、或いは自ら発見したにせよ、それがわかっていると主張する全ての人々について、彼らがそれを書き記しようが、これからであろうが、少なくともこのように私は言う。私の考えでは、その問題について彼らが理解できることは何一つとしてない。少なくとも、それらについての私の書物は存在しないし、将来も決してありえない。なぜなら、それは他の学のように、言葉では語れないものであるからであって、生活を共にして、その問題について多くの集りをなすことから、突如として、それはあたかも飛び火から火がともるようにして、(生徒の) 魂の中に生じて、そこからは生じたそれ自身がそれを養っていくのだ。

『第七書簡』 341b7-d2.²⁶⁾

ここでプラトンは、まず自分が真に語りたいことを、「語り得ない」としている。むしろ真に語りたいこととは、教師と生徒が生活を共にしている中で、突如として生徒の魂の内に生ずる灯火のようなものと言う。だが他方、これは「全く語り得ぬ $\rho\eta\tau\acute{o}\nu\ \gamma\acute{\alpha}\rho\ \sigma\acute{\upsilon}\delta\alpha\mu\acute{\omega}\varsigma\ \acute{\epsilon}\sigma\tau\acute{\iota}\nu$ 」かということ、そ

20) Cherniss, H., *The Riddle of the Early Academy*, Berkeley, University of California Press, 1945.

21) Ross, W. D., *Plato's Theory of Ideas*, Oxford, 1951. pp142-153.

22) Findlay, J. N., *Plato The Written and Unwritten Doctorines*, Routledge, 1974.

23) Vlastos, G., *Platonic Studies*, Princeton University Press, 1973, pp. 379-398.

24) Guthrie, W. K. C., *A history of Greek Philosophy*, V, Cambridge, 1978, pp. 418-442.

25) Irwin, T. H., "The Intellectual background", *The Cambridge Companion to Plato*, Cambridge, 1992. pp. 51-89. 特に pp. 88. n. 82. を参照。

26) テキストは *Platonis Opera*, Tomvs, V, Oxford, 1914 に基づく。

うではない。というのも、続く 344d9-e2 では、「一度それが魂によって把握されるならば、それを忘却するというような怖れはありません。なぜなら、非常に簡潔な言葉で収まっているのだから οὐδὲν γὰρ δεινὸν μὴ τις αὐτὸ ἐπιλάβηται, ἐὰν ἅπαξ τῇ ψυχῇ περιλάβῃ· πάντων γὰρ ἐν βραχυτάτοις κεῖται」とも言われるからである。つまり「語りえぬもの」が「簡潔な言葉」になるという、一見すると矛盾した事態が述べられているのである。

「不文の教説」同様に、書簡は現代のプラトン研究からすれば扱いに苦慮するものである。実際プラトンの書簡といわれるものは現代にまで伝わっており、ディオゲネス・ラエルティオス第三巻 60-61 節では 13 通の書簡が確認されている。現代のプラトン研究者の中には書簡類を全て偽作とするものもいるが、『第七書簡』については真作とみなすものもまた存在する。しかしながら、一般的な傾向としては、対話篇の研究とは切り離して論じられていると言ってよいだろう。だが古代は現代とは異なり、プラトンの言葉と信じられていたものも少なからず存在する。それはとりわけ『第七書簡』にあてはまる。そこからは、諸著作に示されていないものの、プラトンの哲学の核心を占めている「簡潔な言葉」の存在が期待されていたのである。確かにそれはプラトンと生活を共にすることが不可能なものとは共有できない。ヘレニズム、ローマ期の哲学者たちはその限りでは門前払いとなる。けれどもそれが「プラトンと生活を共にしたもの」に宿り、それが「簡潔な言葉」で伝えられていたならば事情は変わってくるだろう。ここでアリストテレスの言葉が再び重要な意味を持つことになる。

2-2) アリストテレスによる原理についての記述

アリストテレスは『形而上学』²⁷⁾ でイデアと感覚対象との関係についてプラトンの考えをまとめながら、ピュタゴラスについて言及する。

27) 『形而上学』は *Aristotle's Metaphysics*, Ross, W. D., Oxford, Vol. 1, et Vol. 2. 1924 を主に使用。ただし *Aristotelis Metaphysica*, Jaeger, W., Oxford, 1957 も参照している。

こうしてプラトンは、存在のうちでもこういったものをアイデアと名づけ、感覚対象はアイデアとは別に存するもの、そして全ての感覚対象はアイデアに基づいて（その名で）呼ばれるとした。実際、そのアイデアによって（その名で）呼ばれる多くの感覚対象は、形相（アイデア）の分有によって（そのようなものとして）存するのである。しかしプラトンはその名前を唯一「分有」と変更した。というのもピュタゴラス派は、数を「模倣」することによって事物は存すると主張しているが、プラトンは「分有」によると、名前を変更したからである。とはいえ、形相の「分有」であれ「模倣」であれ、それは一体何なのかということとを、プラトンは共同の探究課題として残したのだ。

『形而上学』第一巻六章 987b7-14.

ここで注意しておくべきなのは、アイデア論の核心である「分有 μέθεξις」概念は、ピュタゴラス派の「模倣 μίμησις」の名称上の変更に過ぎないとアリストテレスが分析している点である。つまりアリストテレスは、ピュタゴラス思想との類似を示しているのである。もちろん、その差異をも指摘することをアリストテレスは忘れない。

アイデアは他の事物の原因であるが、彼プラトンは、それらアイデアの構成要素とは、全ての「有るもの（＝諸有、諸存在）」の構成要素であると考えた。そうして「大と小」を「素材」として、「一」を「ウーシア」として、これらを原理としたのだ。というのも、「一」を分有することに基づいて、それら（「大と小」）から諸形相と諸数が存在するからだ²⁸。

28) 「諸形相と諸数 τὰ εἶδη εἶναι τοὺς ἀριθμούς」は、ロス (*Aristotle's Metaphysics*) は「諸形相 τὰ εἶδη」を削除し、イェーガー (*Aristotelis Metaphysica* = (OCT.)) は「諸数 τοὺς ἀριθμούς」を削除している。つまり二人のアリストテレス研究家が全く逆の校訂をしている。この点について、本論考は、マーラン (Merlan. P., "Aristotle, 'Met. A 6,987b20-35 'and Plotinus *Enn.*, V. 4.2.8-9", *Phronesis*, 9.45-7.) に従い、「諸形相と諸数」とする。古代で

しかし少なくとも、プラトンは、一方でこの「一」が「ウーシア」であり、何らか他の有るものの述語と語られる「一」ではないという点では、ピュタゴラス派の者達と似た仕方で述べているのであり、また諸数を他の事物にとって、それが有ることの原因であるとする点でも、また同様の仕方で語っているのである。

けれどもピュタゴラス派が、「無限定なもの」を「一」としたのに対して、「二」を立てて、これを「大と小」から成る「無限定なもの」とした点は、プラトンに独自のことである。さらにプラトンは、諸数は感覚的事物とは別にあるとしたが、他方、ピュタゴラス派は、諸数は事物そのものであると主張し、さらに、諸数と事物そのもの（もしくは感覚的事物）の間に数学的諸対象を置かなかった。

さて、「一」と諸数を事物とは別に立てたこと——しかもピュタゴラス派のような仕方ではなく——、さらにアイデアの導入は、ロゴスに於ける探求を通して（プラトンに固有に）あらわれたものである（というも、彼よりも前の人々はディアレクティケーには関わっていなかったからであるが）。

さらにプラトンが、「（一）」とは別の本性のものである「二」を立てたのは、それら最初の数（一と二）を除いて²⁹⁾、諸数が、容易に「二」から、いわば型押し素材からのように生成するからである。

『形而上学』第一卷第六章 987b22-988a1.

上述のことから明らかなのは、プラトンが二つの原因のみを用いた

はアフロディシアスのアレクサンドロスも含めて「諸形相と諸数」でプロティノスまで一致している点を重視すべきであろう。またテオプラストスの「上昇還元」の過程においても両者が登場することに注意したい。

29) *ἔξω τῶν πρώτων* の解釈は、Ross がいくつかの議論および校訂を紹介しているが（*op.cit.* Vol. 1 pp. 173-176）よくわからない。また出隆は（出隆『形而上学』（上）岩波書店 1959）は「素数を除いて」となっているがこれもよくわからない。ここでの話題は諸数の生成なのであるから、「一と二を除いて」とした Taylor の説の方が³（*Aristotle's Metaphysics*, p. 175）有効である。

こと、つまり「ものの何であるか」という原因と、素材にもとづいた原因と、である——というのも、アイデアは事物にとって「そのものが何であるか」ということの原因であり、またアイデアにとっては「一」が原因であるからである——、では「素材」とは何なのか。感覚的事物においてはアイデアが、アイデアにおいては「一」が、（それぞれ）基体に対して述べられているのだが、（その基体となっている）「素材」とはまさに「二」であり、「大と小」なのである。そしてさらに「善くあること」と「悪くあること」の原因をこの二つの「構成要素」のそれぞれに割り振ったが、これは我々が主張しているように、エンペドクレスやアナクサゴラスといった、プラトン以前の哲学者の何人かが試みていたことなのである。

『形而上学』第一卷第六章 988a8-988a17.

以上はアリストテレスによるプラトンのアイデア論の分析である。それによれば、プラトンは、事物の原因たるアイデアさえも「構成要素」に還元され、それは「一」と「大と小」という原理だという。ここで既に先のこのテオプラストスやスペウシッポスの「一と不定の二」を想起することは自然であろう。ここではさらに、「一」は「ウーシア」、「大と小」は「素材」とされているのである。この「一」とは、他のものに述語される「一」ではないとしたと報告されるが、さらにその点も含め、プラトンの原理論を、「ピュタゴラス派の説明と似ている παραπλησίως τοῖς Πυθαγορείοις」と分析している。これも先ほど見た「プラトンとピュタゴラス派の一致」と同一であるようにも思われる。ただし「無限定なもの」を「二」とし、「大と小」に由来するとしたプラトンに対し、「一」を「無限定なもの」としたピュタゴラス派は相違しているとして、この点をアリストテレスは「独自のこと ἰδίον」と評価している。もちろん、事物と「数」を一致させるピュタゴラス派に対し、プラトンはアイデアを「離存」とすると位置付けた点についてもアリストテレスは指摘しているが、この点はここでは置いておく

う。いずれにせよ上記は、プラトンの原理についての理論がピュタゴラスのそれと類似点を擁しながらも異なっているという報告である。これらを踏まえた上で、以下も見てみよう。

実際、どのような原理からアイデアが成立したのか。というのも、数とは、「一」と「不定の二」から出来ているのであり、原理と構成要素とは数の原理であり構成要素だといわれており、そしてアイデアは諸数よりも前にも後にも序列づけられることを許容しないからである。

『形而上学』第十三巻七章 1081a13-17.

既に見たテオプラストスの報告においては、「一と不定の二」からは、まず諸数が成立し、さらにその諸数から諸形相が成立していた。その限りで、ここでのアリストテレスの主張は、数と形相の、いわば同時成立を報告している点で異なっている。とはいえ、諸数と諸形相の原理であり構成要素とされた「一」と「二」について、これまでのアリストテレスの記述を整理してみよう。

一・τὸ ἓν	二・δύας
ウーシア οὐσία	素材 ἡ ὕλη 基体 τὸ ὑποκείμενον 大と小 τὸ μέγα καὶ τὸ μικρόν 無限定定なもの τὸ ἄπειρον 不定な（形容詞）ἀόριστος

「無限定」と「不定な」とは類似した語ではあるが、ギリシア語では異なっていることに注意したい。また上記の「一」と「二」とは、諸形相と諸数とを構成する原理であり構成要素とは述べられるが、ここだけではこれがピュタゴラス派ではなく、プラトン独自のものとは断定できない。初期アカデメイア派の「箔付け」によって両者の教説が分離できないからだ。そこでその教説をプラトンに帰するために必要なのが「不文の教説」である。

2-3) 「一と不定の二」と「不文の教説」

アリストテレスは『形而上学』の中で「一と不定の二」についてさまざまな記述をおこなっている。しかしながらこれまでに見た箇所では「不文の教説」なる文言は存在しない。それが認められるのは『自然学』である。

それ故にプラトンも「素材 ὕλη」と「場・コーラ χώρα」とを同じものであると『ティマイオス』の中で言っている。実際、「受容可能なもの・受容の機能を持つもの τὸ μεταληπτικόν」と「コーラ」は一つであり同じものであるのだ、と（言っているのである）。しかしプラトンは「受容可能なもの」を、いわゆる「不文の教説」の中では『ティマイオス』とは異なる仕方で (ἄλλον δὲ τρόπον ἐκεῖ) 語っている。とはいうものの「場所 τόπος」と「コーラ」とは同一のものであると彼は主張しているは確かである。

『自然学』第四卷第二章 209b11-16.³⁰⁾

「受容可能なもの」や「素材」は、『ティマイオス』の「コーラ」や「受皿」のアリストテレスなりのパラフレーズであろう³¹⁾。ところで「素材」と「コーラ」が同じものであり、「コーラ」と「受容可能なもの」も同じものであるとすると、「コーラ」を介して「素材」と「受容可能なもの」とは同じものということになる。最後の行でそれらはまた「場所」とも言い換えられるが、ここで重要なのは、「受容可能なもの」を『ティマイオス』と「異なる仕方」でプラトンが語っていたということである。『ティマイオス』の「コーラ」は、アイデアを受容することで物的な世界の構成

30) テキストは *Arisottelis Physica*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Ross, W.D., Oxford, 1950 による。

31) 「受容可能なもの」も含めて、アリストテレスの理解の仕方については、上記のロス p. 566 を参照。さらにそこで言及されているテイラー (Taylor, A. E., *A Commentary on Plato's Timaeus*, Oxford, 1928) の当該箇所、擬ブルタルコス『哲学者たちの自然学説誌』第一巻第 19 章を参照。

に関わっていた。つまり「異なる仕方」で語るとは、「この世界」での話ではなく、「アイデア界」であることを意味するのである。

議論の本筋からは外れるが、プラトンは確かに説明すべきである。どのような理由によって諸形相と諸数とが「場所 τόπος」のうちに存しないのか述べる必要がある。少なくとも「場所 τόπος」が「分有可能なもの・分有の機能を持つもの τὸ μεθεκτικόν」とするならば、「分有可能なもの」が「大と小」であるにせよ、或いは『ティマイオス』で彼が書いているように「素材」であるにせよ、である。

『自然学』第四卷第二章 209b33-210a2.

『自然学』では様々な言い換えをされてはいるものの、「不文の教説」の「受容可能なもの」が「大と小」ともされていることから、それは先の『形而上学』の中での「二」に比定されうる。そして「素材としての二」が語られているということは、「不文の教説」でウーシアとして語られていた「一」が、それに対応するものだということを、強く推測させる。「素材」である「二」が、ウーシアとしての「一」を分有することで——ここでは「受容可能なもの」とされているが——、諸数や諸形相を生成するとされた場面が報告されているのである。

こうして『自然学』と『形而上学』を総合すると、「不文の教説」の内実はシンプリキオスによって保存されたアレクサンドロスの証言内容となるだろう。

アレクサンドロスは言っている、『プラトンによれば、全てのもの、そしてアイデアそのものの原理でもあるものは「一」と「不定の二」であり、プラトンは「不定の二」を「大と小」であるとも言っていたのだ。そしてこれは『善について』の中で³²⁾、アリストテレスが記憶しているとおりである』と。人はこれをスベウシッポスからも、また

クセノクラテスからも、また他の人々からも、つまりプラトンの『善について』の講義に出席してそれを聞いた人々から得ることが出来る。というのも、彼等全てはプラトンの教説を記述し、保存し、「プラトンはそれらの原理を使っていた」と言っているからだ。

シンプリキオス『自然学注解』151. 6-19.

(＝スペウシポス「断片」45)

確かにアレクサンドロスの証言している内容を、そのままの形で「不文の教説」だとアリストテレス自身が断言している箇所はない。しかし既に見たように、『形而上学』と『自然学』の証言からは、「不文の教説」が上記のように理解されうるのである。そして『第七書簡』を思い出せば、プラトンと生活を共にしたアリストテレスの資格によって、この報告は信頼に足るものとされたと考えられる。「語りえぬもの」とされたプラトン哲学の核心は、上記のような「簡潔な言葉」で伝えられているのだと当時の哲学者は考えていたと思われる。そしてその意味で、「不文の教説」は、確証を持ってプラトンに帰せられるのである。

以上のように、ピュタゴラス主義と同一視されたプラトンと、彼を含めた初期アカデメイア派の「不定の二」は、アリストテレスによる「不文の教説」という報告によって、ウーシアである「一」を受容し分有し、それによって諸数や諸形相を構成する「素材」と言う意味で、「知的素材」と位置付けられることになったと言えるだろう。

32) ここで言及されている『善について』は、いわゆる「失敗した講義」としてアリストテレスの「断片」の中で伝えられているものとは異なるものであろう。というのも、そこでは、「善について」公開的な講義を行ったとされているが、翻ってここでは、プラトンと生活を共にしなければ伝わらない「不文の教説」を巡るものであるからだ。

まとめにかえて

『二つの素材』において表れた「知的素材」の系譜を、ピュタゴラス、プラトン、初期アカデメイア派やテオプラストス、さらにはアリストテレスの断片や『形而上学』、さらには『自然学』の「不文の教説」をもとに辿ってきた。では「知的素材」は、プロティノスの初期以降の作品にも受け継がれているのだろうか。既に見たように、その主張が「維持されている」のか、「維持されていない」のか、その指標がなければ議論は決着を見ない。語彙に従えば「維持されていない」ことになる。では以下の箇所はどのように見えるだろうか。

Enn., VI-6『数について』では、知性界における諸形相（諸有・諸アイデア）の生成と諸数との関係が問われている。先に見たテオプラストス『形而上学』でプラトンの名と共に記述された上昇還元の系列、すなわち「諸アイデア」→「諸数」の関係を思い出すべきであろう。つまり「知性界」において諸アイデアが多であることの根拠としての複数性は、諸アイデア以前に導出されている必要があるのだが、数が論理的に先行してしまうと、今度は数自身の複数性が説明されなければならなくなる。これは、複数として成立する数は、自身が存在する根拠を「（一なる）有」にしか求められないことを意味する³³⁾。従って、プロティノスが問われているのは、「一なる有」から「多なる数」を導出する論理的過程の説明である。ここでプロティノスは、「有」に「力 *δύναμις*」が内在しているとする。原文と対照させてみよう。

全ての数が、諸有そのものよりも（先に）あった。しかしもし数が諸

33) テキストの上ではプロティノスは、数と有とどちらが先かを検討してはいるが、数が多なる有の根拠となる存在とされた時点で、それ以前には一なる有しかない以上、この手続きは妥当であろう（*Enn.*, VI-6.9.9-10）。

有よりも先であるとするれば、数は諸有ではなかった。数は「(一なる) 有 τὸ ὄν」の中にあったのだが、有の数ではなかった。何故ならば有はいまだ「一」であったからだ。

Πᾶς ἄρα ὁ ἀριθμὸς ἦν πρὸ αὐτῶν τῶν ὄντων. Ἀλλ' εἰ πρὸ τῶν ὄντων, οὐκ ἦν ὄντα. Ἡ ἦν ἐν τῷ ὄντι, οὐκ ἀριθμὸς ὦν τοῦ ὄντος_ἐν γὰρ ἦν ἔτι τὸ ὄν.

Enn., VI-6 (34). 9. 23-25.

数の位置付けに注意したい。「数は「(一なる) 有の中にあった」という表現は、有と数との一体性を表すものであるが、同時に両者は「有」と「数」という異なる語彙で表されている限りでは異なるものでもあるとも言えるだろう。さらに「有の数ではなかった」という表現も両者の差異を示している。そして「有はいまだ「一」であった」とは、まだそこでは複数性が成立していないことを意味している。しかしこの「数」は、複数性の根拠として諸形相の生成に関わらなければならない。「一」にして「多」なるものとして「数」はこの場にいるのである

しかし、「数という力 ἡ τοῦ ἀριθμοῦ δύναμις」が成立すると、数は「有」を分割し、いわば「有」に「多 τὸ πλῆθος」を産出させるのである。

ibid., 9. 26-27.³⁴⁾

「数という力」という概念がこの局面を開くために導かれる³⁵⁾。「力」とは、ここではまず「能力」、可能性として静的に把握されるべきも

34) ἐποίησεν αὐτὸν の目的語は 15 章を見る限りは「有」と思われる。Kirchhoch は αὐτό と校訂する。また「数という力」については *ibid.*, 15.33-34 に ταῖς γὰρ δυνάμεσι τοῦ ἀριθμοῦ ἐσχίσθη καὶ τοσαῦτα ἐγέννησεν, ὅσα ἦν ὁ ἀριθμός. という箇所も存在する。

35) このときの ἡ τοῦ ἀριθμοῦ δύναμις は「数の有する力」とも解しうる。しかしいずれにせよ、「数」と「力」が密接であることを表している点で、「数という力」と同格の解釈と差異はないだろう。

のである。しかし同時に「能力」は、「成立する（ὕποστασις）」というあり方、発揮状態として動的にも把握されるべきものである。言い換えれば「数という力」は、「一なる有」を先行者として持つ限り、つまり複数性を先行原理として持たない限りで、単数であると同時に、可能的には複数として把握されるべきものである。

ここで「（一なる有）τὸ ὄν」→「数ὁ ἀριθμός」→「諸有τὰ ὄντα」という系列に注意したい。というのも、先にテオプラストス『形而上学』でプラトンの名と共に記述された上昇還元の系列、すなわち「諸イデア」→「諸数」→「一と不定の二」という関係と対応しているように見えるからである。だとすれば、諸形相を産み出すこの「有」が「不定の二」であり、「知的素材」なのだろうか。

確かに「数という力」が発揮する以前の「（一なる）有」は、完全に生成し成立した相の許に捉えられてはいない。「有」もまた存在している限りは「一かつ多」である以上³⁶⁾、単数性によって理解される場面では、それは本来の意味での「有」ではないからである。そして動的な能力を持ちながらも、それを行使していない、この状態の「有」を想定することによって、未完成で、いまだ十全に成立していない段階にもかかわらず、存在の段階に移行すべきものとして「有」を規定することも可能となる³⁷⁾。この状態は視力にも譬えられる知性が、未だその力を発揮していない、純粋な「力」にとどまっている過程だと考えられる。そうであるとすると、この未だ成立していない段階での「有」とは、「数という力」を内在している「有」とは、或る意味では「不定の二」であり、「知的素材」に相当するともいえるだろう³⁸⁾。しかし初期作品 *Enn.*, II-4 での原理と

36) *Enn.*, VI-6, 8.22.

37) これについては、Bussanich, John., *The one and its relation to intellect in Plotinus*, Leiden, 1988, pp. 78-80 参照。そこでも有は知性を発揮していない the potential intellect と解されている。

38) 既に見たように、「不定の二」と共に原理とされていた「一」は、『形而上学』第一巻第六章においては「ウーシア」であったが、これに対しプロティノスは「一」を一貫して存在を超えたものとして描いている。

「知的素材」の系譜（金澤）

しての「知的素材」が単に「不定の二」であるのに対し、中期作品 *Enn.*, VI-6 ではこれまで見てきたように、「定まった段階」をも見越したものである。こう見れば、「知的素材」は、その内実に大幅な解釈を伴っているとはいえ、或る意味では「維持されている」と言えるかもしれない。しかし、語彙的な面からすれば「維持されてはいない」のであり、むしろそれが使われなかった積極的な理由を探す必要があろう。

本稿は、科学研究費助成事業・研究種目基盤研究（C）「バクトリアにおけるギリシア思想のインド文化への拡大、翻訳による融合と両文化の対話（研究代表者：金澤修）」による成果である。